

令和元年度指定

文部科学省 地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）

研究開発実施報告書

第3年次

研究開発主題

グローバル化に対応した地域デザインを創造する地域創生リーダーの育成

令和4年3月

香川県立高松北高等学校

グローバル化に対応した地域デザインを創造する地域創生リーダーの育成

6年間を見通した探究的な学びの過程

グローバルな視点からの探究

- ・留学生との交流
- ・海外フィールドワーク 等

海外交流アドバイザー

中学校時

- ・地域学習
- ・海外修学旅行
- ・語学研修

1年次

- 課題の設定
- 情報収集・整理
- フィールドワーク
- 実践・対話・探究
- 成果発表

2年次

- 課題の再設定
- フィールドワーク
- 地域創造案の策定
- 成果発表

3年次

- 地域創造案の改訂
- 地域デザイン策定
- 発表・提言・実践

地域に関する視点からの探究

- ・地域でのフィールドワーク
- 地域協働学習実施指導員

グローバルな
視点をもちながら、多文化共生
の地域社会を
創造する人物

身に付けるべき 資質・能力

- 体感力
- 対話力
- 探究力
- 提言力

探究課題の設定

学校や取り巻く地域、県の状況

探究課題

- 芸術
- スポーツ
- 看護・医療・福祉
- 防災
- 環境
- グローバル化への対応

課題解決のための連携組織

学校と地域が協働するためのコンソーシアム

- ・育てる人物像の共有
- ・高等学校の取組みへの支援
- ・生徒の学びの評価

高松市
・危機管理
・観光交流

六吹学園

- ・外国人への日本語教育 等

(株)人生は上々だ
・企業イノベーション

高松北高校

【地域協働推進校】
県内唯一の
公立中高一貫教育校

高松工芸高校 デザイン科

【地域協働推進連携校】
地域デザインに関する学習がより進んでいる学科

香川大学創造工学部

- ・防災、危機管理
- ・イノベーション教育

県・県教委

県立高校
対象に地
域連携や
探究的な
学びを推
進する取
組み

目次

研究開発構想ビジュアル図

I 研究開発報告書

1	研究開発主題	1
2	研究開発の目的・目標	1
3	研究開発の概要	1
4	学校の概要	2
5	研究開発の体制	2
6	管理機関の取組・支援実績	3
7	研究開発の実績	5
8	各教科への波及効果	17
9	生徒アンケートによる分析	25
10	ルーブリック評価による分析	27
11	今後の探究活動に向けて	28

II グローバル研修報告

1	県内留学生等との異文化交流	29
2	台湾 啟英高級中等学校 オンライン交流	32
3	韓国 京仁高等学校 オンライン交流	33
4	エンパワーメントプログラム	34

III 国内課題探究研修報告

1	1年生分野別県内研修	37
2	東北防災・環境研修	39
3	岐阜スポーツ・芸術研修	41

IV 生徒探究レポート

1	1年生探究活動要旨・発表用スライド	43
2	2年生地域創生案企画書	60
3	『高校生国際シンポジウム』研究要綱・発表用ポスター	84

V 資料

	教育課程表	87
--	-------	----

I 研究開発報告書

1 研究開発主題

グローバル化に対応した地域デザインを創造する地域創生リーダーの育成

2 研究開発の目的・目標

(1) 目的

急速にグローバル化が進む本県にあって、地域の活性化や地域創生を進めるためには、グローバルな視野を持った政策の企画や地域創生のグランドデザインが必要不可欠となっている。そのため、高校段階からの地域に根ざしたグローバル教育の一層の充実と課題探究能力育成の取組が重要となっているとともに、地域活性化・地域創生に対する強い意欲を持ち、政策の企画力、実行力を備えた人材の育成が急務となっている。

本研究開発においては、このような時代の急変に伴う諸課題を生徒自身の興味関心に応じて主体的に発見し、新たな地域創生の方策について自ら構想・探究するとともに、それら諸課題の解決のために主体的に行動できる人物を地域創生リーダーと位置づけ、その育成を目的とする。

(2) 目標

目的の達成に向けて、生徒が探究活動を通して身に付けなければならない力を、次の4つの言葉の頭の文字をとって「4 T」の形に整理した。

- 「体感力」：国内外でのフィールドワークや諸外国人との交流を通して、生徒自らがグローバルな視野と感性を身に付けたり、地域のグローバル化の実態を受け止め、今後主体的に諸課題の解決に取り組んでいくことが必要であることを強く実感する力
- 「対話力」：設定した探究課題に関して収集した情報をもとに、県内大学や専門学校、関係機関の専門家や関係者をはじめ、協働探究を進める仲間達とも対話しながら情報を整理・分析し、より高度な情報へと高めていく力
- 「探究力」：収集した情報をもとに、対話を通して整理・統合し、検証しながら諸課題の本質に迫るとともに、より多面的・多角的に分析したり、課題解決方法を見出すためにより高度な情報を収集したり、整理・統合して政策をまとめていく力
- 「提言力」：課題解決のために立案した政策や具体的かつ実効性のある地域創生デザインを、企画書などにわかりやすくまとめ関係機関に発信していく力や、様々な手段や方法を用いて周囲の者を納得させていく表現力やプレゼンテーション能力

4 Tの力は相互補完的で、互いに関連し合ったり高め合ったりしながら身に付けたり、高められたりする力でもある。目的達成のためには欠かすことのできないものである。したがって、可能な限り関係機関と連携しながら多様な交流・研修の場と提言・実践を確保し、すべての能力伸長を目指していく。

3 研究開発の概要

グローバル化が進む香川県において、地域の課題の解消に向けた地域デザインの構想力・提言力を育み、生徒自らが主体的に地域と連携しながら地域活性化実現の原動力となるとともに、グローバルな視野を持ち多文化共生の地域社会を創造する地域創生リーダーを育成する。その実現に向けて取り組むべき探究内容を、以下のようにまとめた。

- (1) グローバル化の進む地域の産業や観光分野における課題の解消・成長戦略に関する探究
- (2) 芸術関連施設や瀬戸内国際芸術祭の舞台となった島々を中核とした地域振興に関する探究
- (3) 防災対策や環境保全など、安心・安全なまちづくりに関する探究
- (4) 看護・医療・福祉など地域住民の安心・安全な生活環境づくりに関する探究
- (5) スポーツ関連施設や地元のスポーツチームを中核とした地域振興に関する探究

そして、これら「グローバル化」，「芸術」，「防災・環境」，「看護・医療・福祉」，「スポーツ」の5分野から探究テーマを設定することとした。個別の研究課題の設定は生徒個人やグループの自主性に任せることとし，総合的な探究の時間や社会と情報等の中で，課題設定からフィールドワーク等を通じた情報収集活動，対話を通じた探究活動，さらには提言・実践に至るまでの一連の地域創生デザインの創造過程を研究開発する。3年間の計画的な研究開発によって生徒一人ひとりの構想力・探究力・提言力を育むとともに，生徒自らが地域と連携しながら地域活性化実現の原動力となり，ひいてはグローバルな視野を持ち多文化が共生する新時代の地域社会を創造・牽引する地域創生リーダーへと成長していくことが期待できる。

4 学校の概要

本校は併設型中高一貫教育校であり，中学校は1学年3学級，高等学校は1学年6学級規模で，高等学校はすべて普通科である。各学年の生徒数は次の表のとおりである。（令和3年4月9日現在）

学校	高松北中学校				高松北高等学校			
	1年	2年	3年	合計	1年	2年	3年	合計
生徒数	105	103	102	310	211	238	221	670

なお，高等学校では，多様な生徒のニーズを反映して，下表のと通りの学級編成を行っている。

学年	1年			2・3年				
	飛翔1	飛翔2	一般	飛翔	グローバル	サイエンス	カルチャー	スポーツ
学級数	1	1	4	1	1	1	3	1

高校生の約半数は高松北中学校からの内進生で，残り約半数が他の中学校からの外進生である。

○ 進学・就職状況

過去3年間平均の進路状況は，進学率約89%，就職率約2%，浪人・その他約9%である。進学者の内訳は，過去3年間の平均では国公立大学が約18%，私立大学が約62%，短大・専門学校が約21%である。進学者の約75%が県外の大学等へ進学している。就職者の大半は地方公務員で，民間企業への就職者は極めて少ない。

5 研究開発の体制

1 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
堀井 秀之	東京大学名誉教授 (一社)日本社会イノベーションセンター 代表	学識経験者及びイノベーション教育に専門知識を有する者
村川 雅弘	甲南女子大学人間科学部・教授	学識経験者及びカリキュラム・マネジメントに関して専門知識を有する者
西成 典久	香川大学経済学部・教授	学識経験者及び地域連携に関して専門知識を有する者



2 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
香川県教育委員会	教育長 工代 祐司
香川県立高松北高等学校	校長 國木 健司
香川県立高松工芸高等学校（連携校）	校長 塩崎 潤
香川大学創造工学部	教授 末永 慶寛
高松市総務局危機管理課	課長 為定 典生
創造都市推進局文化・観光・スポーツ部観光交流課	課長 吉峰 秀樹
穴吹学園 穴吹ビジネスカレッジ	校長 篠原 達司
(株) 人生は上々だ	代表 村上 モリロー



3 カリキュラム開発等専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職
海外交流アドバイザー	喜多野裕介	名鉄観光サービス（株）高松支店長
海外交流アドバイザー	大本 耕造	（株）JTB高松支店・営業第一課長
海外交流アドバイザー	阿吹 隆広	（株）JTB高松支店・営業第一課長代理
海外交流アドバイザー	曾我部友仁	（株）日本旅行高松支店・営業課長
海外交流アドバイザー	南出 准	（株）アイエスエイ関西支社・法人営業部担当
地域協働学習実施支援員	村上モリロー	（株）人生は上々だ・代表
地域協働学習実施支援員	吉川 賢司	（株）人生は上々だ・アカウントエグゼクティブ

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
コンソーシアム			→										
海外交流アドバイザー	→												
地域協働学習実施支援員	→												
運営指導委員会			→	→					→		→		

(2) 実績の証明

①運営指導委員会の活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和3年6月4日 (第1回)	高松北高等学校を視察(3年生成果発表会)及び第1回会合(今年度の事業の進め方についての助言)
令和3年7月2日 (第2回)	高松北高等学校を視察(3年生代表者発表会)及び第2回の会合(探究活動充実についての助言)
令和3年11月19日 (第3回)	高松北高等学校を視察(2年生中間報告会)及び第3回の会合(探究活動充実や今年度の課題についての助言)
令和4年2月18日 (第4回)	高松北高等学校を視察(2年生代表者発表会)及び第4回の会合(これまでの研究開発の総括と今後の取組への助言)

②コンソーシアムの活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和3年6月4日 (第1回)	第1回運営協議会 ・3年生成果発表会の審査及び生徒への指導・助言 ・分野別の担当教員とのグループ協議及び指導・助言 ・3年目の研究開発実施計画等協議, 研究開発推進方針等決定
令和3年7月2日 (第2回)	第2回運営協議会 ・3年生代表者発表会の審査及び生徒への指導・助言 ・3年団の担当教員への指導・助言 ・研究の現状や課題, 今後の研究方針等について全体協議
令和3年10月22日 (第3回)	第3回運営協議会 ・1年生中間報告会の審査及び生徒への指導・助言 ・分野別の担当教員とのグループ協議及び指導・助言 ・研究の現状や課題, 今後の研究方針等について全体協議
令和3年11月19日 (第4回)	第4回運営協議会 ・2年生中間報告会の審査及び生徒への指導・助言 ・分野別の担当教員とのグループ協議及び指導・助言 ・研究の現状や課題, 今後の研究方針等について全体協議
令和4年2月18日 (第5回)	第5回運営協議会 ・2年生代表者発表会の審査及び生徒への指導・助言 ・これまでの研究開発の総括, 今後の取組への助言

③海外交流アドバイザーの活動実績

実施日	所属・氏名	活動内容
令和3年7月19日	JTB 阿吹氏	・韓国の高校生とのオンライン交流のコーディネーター
令和3年10月24日～ 26日	日本旅行 湯谷氏	・東北防災・環境研修旅行のコーディネーター
令和3年12月18日～ 19日	名鉄観光 池内氏	・岐阜スポーツ・芸術研修旅行のコーディネーター
令和3年12月24日～ 28日	ISA 南出氏	・エンパワーメントプログラムのコーディネーター

④地域協働学習実施支援員の活動実績

活動日程	内容
令和3年4月23日	講演会「より良い探究活動に向けて」 ・優れた探究活動とはどのようなものか、探究活動を進めるうえでの留意点や効果的な手法について指導
令和3年6月4日	第1回運営協議会 ・今年度の事業計画についての指導助言 ・芸術分野担当教員に対し協働学習の進め方を指導
令和3年7月2日	第2回運営協議会 ・実施計画及び研究開発推進方針等について協議し、今後の研究開発への支援方針や方法等を決定
令和3年10月22日	第3回運営協議会 ・芸術分野担当教員に対し協働学習の進め方を指導 ・協働の現状や課題、今後の協働の進め方について指導
令和3年11月19日	第4回運営協議会 ・芸術分野担当教員に対し協働学習の進め方を指導 ・協働の現状や課題、今後の協働の進め方について指導
令和4年2月18日	第5回運営協議会 ・これまでの研究開発の総括、今後の取組への助言

⑤管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

- ・指定校での探究活動の高度化につなげるため、併設中学校での探究活動やグローバル関係の行事に対する予算措置を行った。
- ・推進校の成果を広く県内の高校へ普及させるため、オンデマンド配信形式にて第3回香川県高校生探究発表会を開催した。本校の教員が紙上にて取組の成果の発表をするとともに、1・2年生の代表7グループ（県下で最大数）が動画の公開による発表を行い、県内の高校全体として探究的な学びの推進につながった。

7 研究開発の実績

（1）各学年における研究開発の取組

「総合的な探究の時間」として、次表のとおり探究活動を実施した。

【1年生】

月	テーマ	主な活動内容
4月	オリエンテーション 外部講師による講演会 マンダラート作成	・校長より探究活動の趣旨について説明する ・コンソーシアムの村上モリロー氏による、動機付けを目的とした「より良い探究活動に向けて」の講演会を実施 ・マンダラートを作成し、テーマ設定につなげる
5月	分野別講演会 分野決定・探究班編成	・テーマ決定の参考にするため、探究分野ごとに外部講師を招聘し、専門的立場から探究活動等についての講演会を実施 ・分野を決定し、クラス内で班編成を行う
6月	探究テーマ設定 フィールドワーク計画 ルーブリック評価Ⅰ	・探究班ごとに探究テーマを設定する ・フィールドワーク内容等を計画 ・ルーブリック評価Ⅰ（テーマ設定）実施

7月	県内研修 フィールドワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・探究分野ごとに県内7施設で研修 ・フィールドワーク（夏季休業中）
8月	フィールドワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワーク（夏季休業中）
9月	フィールドワークまとめ ループリック評価Ⅱ ループリック評価Ⅲ 中間報告会に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークのまとめ，結果の集約 ・ループリック評価Ⅱ（フィールドワーク計画）実施 ・ループリック評価Ⅲ（フィールドワーク実施）実施 ・中間報告会に向けての発表準備
10月	中間報告会に向けて 中間報告会 中間報告会の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・中間報告会に向けての発表準備 ・中間報告会（分野ごとにコンソーシアムの先生方を迎えて） ・学年全体での振り返り
11月	中間報告会の振り返り ループリック評価Ⅳ テーマと仮説の深化	<ul style="list-style-type: none"> ・班ごとの振り返り ・ループリック評価Ⅳ（中間報告会）実施 ・探究手法，情報収集，現地研修等について
12月	仮説検証方法の深化 フィールドワーク計画 フィールドワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・情報の集約，適切な仮説検証方法の検討 ・フィールドワークの内容決定および事前準備 ・フィールドワーク（冬季休業中）
1月	フィールドワークまとめ ループリック評価Ⅴ 成果発表会に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークのまとめ，結果の集約 ・ループリック評価Ⅴ（探究活動）実施 ・パワーポイント作成，発表原稿作成
2月	成果発表会に向けて 成果発表会 ループリック評価Ⅵ	<ul style="list-style-type: none"> ・成果発表会リハーサル ・分野ごとに指導教諭からの指導・助言，分野別代表班の決定 ・ループリック評価Ⅵ（成果発表会）実施
3月	ループリック評価Ⅶ 高校生探究発表会 振り返り・次年度に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・ループリック評価Ⅶ（1年間の取組）実施 ・分野別代表班による第3回香川県高校生探究発表会への参加 ・キャリア・パスポートを用いて1年間の振り返り

【2年生】

月	テーマ	主な活動内容
4月	探究テーマ・探究班決定	<ul style="list-style-type: none"> ・新たに地域課題を設定し，班内で探究テーマを決定
5月	探究テーマ・探究班決定	<ul style="list-style-type: none"> ・探究計画作成・情報収集
6月	探究活動・情報収集・分析	<ul style="list-style-type: none"> ・探究班ごとに提言・実践を見据えた情報収集・分析
7月	現地研修計画 現地研修	<ul style="list-style-type: none"> ・現地研修内容等を計画 ・現地研修（夏季休業中）
8月	現地研修	<ul style="list-style-type: none"> ・現地研修（夏季休業中）
9月	現地研修のまとめ 探究の深化 分野別講演会	<ul style="list-style-type: none"> ・現地研修のまとめ ・地域課題解決策を探究 ・探究分野ごとに外部講師を招聘し，専門的立場から探究活動等についての講演を実施

10月	探究の深化 中間報告会に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・地域課題解決策を探究 ・中間報告会に向けての発表準備
11月	中間報告会 中間報告会の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・中間報告会（分野ごとに実施） ・中間報告会の反省，成果発表会に向けての課題等分析
12月	探究の深化 現地研修計画 現地研修	<ul style="list-style-type: none"> ・探究手法，情報収集，現地研修等について ・現地研修内容等を計画 ・現地研修（冬季休業中）
1月	現地研修のまとめ 地域創生案作成	<ul style="list-style-type: none"> ・現地研修（冬季休業中） ・班別に地域創生案企画書を作成
2月	地域創生案作成 代表班発表	<ul style="list-style-type: none"> ・班別に地域創生案企画書を完成 ・企画書の提言，実践計画について考察 ・各分野の代表班がパワーポイントで発表
3月	次年度に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の反省とまとめ

【3年生】

月	テーマ	主な活動内容
4月	成果発表会に向けて	・発表ポスター・原稿の作成
5月	成果発表会に向けて	・発表練習・リハーサル
6月	成果発表会	・全班によるポスター発表
7月	代表者発表会	・代表者によるスライド発表

(2) 実施日程（月別実施回数）

実施項目	学年	実施日程											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「総合的な探究の時間」における地域探究学習	1	3	2	4	2	※①	2	4	3	3	3	2	1
	2	4	2	4	2	※①	2	4	3	3	3	2	1
	3	4	2	4	2	※②	※②	※②	※③	※③	※③	※③	
「社会と情報」における探究活動	1	3	3	3	2	0	2	4	3	3	3	2	1

※①：探究班ごとの現地研修等

※②：探究成果をもとに進路探究活動

※③：進路決定後に提言・実践活動

(3) 実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

- ・年度当初にグローバル委員会を中心とした指導体制のもと，生徒各自が主体的に取り組める地域課題に関する探究テーマを設定させる。その際，今後のさらなるグローバル化に伴う社会の変化の中で地域振興に寄与できると考える次の5分野に関するテーマを設定させた。

【グローバル化，芸術，スポーツ，防災・環境，看護・医療・福祉】

- ・海外研修は昨年度に引き続き全て中止となったが，グローバル事業の基本となるグローバルな感

性や英語コミュニケーション力を身に付けさせるため、県内での外国人との交流会や研修会、海外の学生とのオンラインでの交流、英語コミュニケーション能力の強化を図る外国語授業の充実に取り組んだ。

- 全ての教科の授業担当者が可能な範囲で地域に関連した内容やグローバル化に関する内容を取り扱ったり、グループによる対話的かつ探究的な学習の機会を取り入れたりして、その成果をスピーチ又はプレゼンしていく授業を実践した。
- 総合的な探究の時間においては、各教科・科目等において育成を図ったグローバルな感性や視点、対話力、表現力を総合的・統合的に活用しながら探究する力を育成することとした。
- 1，2学年ともにコンソーシアムの構成団体や5分野に関連する関係機関の専門家を招いた講演会を開催するとともに、1学年については県内の関係機関と連携した現地研修を1学期末に7カ所で行った。この研修はテーマを設定する上で大いに参考になるとともに、体感力や探究意欲の向上にも大きく貢献した。
- 現地調査の計画・実施に際しては、地域協働学習実施支援員やコンソーシアム構成員からも具体的な指導を受けたり、これまでの実施内容を参考にしながら各分野の指導担当教員が指導・助言を行った。
- 情報の収集活動とその整理・分析に関しては、あらかじめ「社会と情報」及び「数学Ⅰ」の各単元において基本的な実施方法を指導し、前者の授業ではそれぞれの班別に設定したテーマに関する情報収集や情報の整理・分析を行った。
- 2学年では、総合的な探究の時間における探究活動は文系・理系コースの枠を外した文理混合型となるよう分野別の活動に転換し、各分野の探究班が相互に意見交換や質疑応答を行うなど対話型・協働型の探究活動を推進した。
- 中間報告会及び成果発表会においては、コンソーシアム構成員による審査と指導助言を行うとともに、コンソーシアムの助言を受けながら作成したループブックをもとに評価を行った。なお、運営協議会ではコンソーシアム構成員が分野別指導担当教員に対し個別に指導・助言を行う分科会も設けたため、校内の指導体制の充実に役立った。
- 3学年では2学年次の探究内容をさらに深めた上で、ポスター発表を行った。さらに、探究内容の優れている班を選抜して代表者発表会を開催し、3学年に加えて2学年にも発表会に参加させることで効果的な探究手法や発表の仕方について学年を超えて共有することができた。
- 1，2学年の各分野別の地域課題研究内容は以下のとおりである。

【グローバル分野の探究】

1年生は11班41名、2年生は15班78名の生徒が探究課題を設定した。地域の伝統工芸や島しょ部の観光振興等、地域活性化をテーマにしたものが多い。外国人観光客への対応をテーマに選んだ班が最も多かったが、四国遍路や古墳など文化遺産をテーマに取り上げた班もあった。外国人留学生との交流活動や海外の学生とのオンライン交流等を通してグローバルな感性とコミュニケーション力を身に付けさせた。また、県内の観光地や空港・駅、県庁・市役所等に足を運んでヒアリングや実地調査を行った。

【芸術分野の探究】

芸術分野は1年生が10班34名、2年生が9班33名の生徒が探究課題を設定した。高松市美術館をはじめとする芸術関連施設や瀬戸内国際芸術祭の舞台となった島々で現地研修を行った。県下でも人気の観光スポットをテーマに選んだり、各種イベントの活性化や新企画を立案した探究班が多い。

【スポーツ分野の探究】

スポーツ分野は1年生が14班54名、2年生は3班13名が探究課題を設定した。学年によって、選択した班数が大きく異なる。スポーツ関連施設や地元のスポーツチーム、香川県教育委員会保健体育課等での現地研修を行った。スポーツという共通するテーマでも、班によって高齢者・

子供・障がい者等、様々な対象を想定しながら探究活動に取り組んでいる。

【防災・環境分野の探究】

1年生は9班42名、2年生は15班78名が探究課題を設定した。香川大学創造工学部での体験型防災研修や高松市防災合同庁舎での研修、実際に避難経路をたどってのフィールドワーク等を行い、情報を収集している。南海トラフ地震に関連したテーマを設定した班が最も多いが、2年生ではゴミ問題や水質問題等の環境問題を取り上げた班も多い。

【看護・医療・福祉分野の探究】

1年生は11班40名、2年生は6班32名が探究課題を設定した。遠隔医療や医療従事者の不足といった近年注目される医療問題に加え、外国人のための医療制度の整備や糖尿病対策、さらには高齢者福祉に関する課題をテーマにした班が多い。香川大学医学部や穴吹医療大学校、県内の各病院等における現地研修やフィールドワークを行い、安心・安全な生活環境を整えるための方策等について探究を行った。

- ②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な探究の時間）
- ・「総合的な探究の時間」（各学年1単位）及び1学年の「社会と情報」2単位のうちの1単位を研究開発のための情報収集や整理、まとめ、成果発表の時間に充てた。
- ③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について
- ・各学年団や各教科会において、各教科・科目での地域学習、探究的学習・対話的学習の取組によって育成を図ることとした資質・能力を、総合的な探究の時間において総合的・統合的に活用することに全校を挙げて取り組むことを周知徹底し実践した。
 - ・併設する高松北中学校時代に推進してきた対話的な学びを発展させることができるよう、各教科・科目での探究的・対話的な授業実践には積極的に取り組むこととした。
 - ・外国人との積極的なコミュニケーションが図れるよう総合的な探究の時間において多様な外国人との交流の場を設けるとともに、外国語の各科目の指導における英語によるプレゼン力やコミュニケーション能力の育成を一層推進した。
- ④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制
- 校長・教頭・主幹教諭・教諭7名からなるグローバル委員会が中心となり、外部関係機関と連携しながら、年間スケジュールの調整、進捗管理等を行うとともに、必要に応じてカリキュラム等の変更・追加・改善についての研究を行った。
- ⑤学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）
- グローバル委員会の下、主幹教諭・学年主任等により構成される探究委員会を中心に、「総合的な探究の時間」の年間実施計画作成や現地研修の計画・指導等を行い、計画的な研究開発に努めた。また、昨年度から各教科・科目と総合的な探究の時間の教科等横断的な取組を充実させることとしたため、各教科会も研究開発で大きな役割を果たすことになり、全校的な研究体制が更に充実した。また、コンソーシアムの運営協議会では昨年に引き続き分科会を設け、指導担当教員への具体的な指導や支援を行った。
- ⑥カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて
- ・海外交流アドバイザーは、当初本校が実施を計画していた海外研修旅行について、その企画段階における指導・助言を予定し、学校長が委嘱し無報酬で担当していた。予定していた海外研修がすべて中止となったため、オンラインによる交流の企画や現地との調整役を依頼した。
 - ・地域協働学習実施支援員は、学校の依頼を受け運営協議会での一員として地域の課題や探究活動に関する指導・助言を行うほか、今年度は1年生を対象としたより良い探究活動のあり方についての講演を行ったり、中間報告会や成果発表会での審査や講評、総合の時間内での探究活動の具

体的アドバイス等を行った。

⑦学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

- ・コンソーシアムでは、3年間を見通した研究開発計画や年間指導計画の作成、進捗管理、課題の解決方法などについて協議や調整を行いながら研究開発を進めているほか、各探究分野ごとの進捗管理や探究成果の検証・評価については、コンソーシアム関係者に加え、探究活動に際して連携する関係機関の専門家からも指導・助言を受けた。
- ・グローバル委員会を適宜開催し、研究開発計画の調整、進捗管理、評価方法等についての検討を行っており、教科横断的な研究やルーブリックによる評価、ICT機器を活用した情報収集など、研究開発の推進や深化に貢献した。

⑧カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

- ・5回の運営協議会において、全体計画の策定や進捗管理、計画の変更・修正を行うとともに、プレゼン力育成の取組や評価方法の工夫など新たな取組も進めるなど、研究開発全般に関わった。
- ・専門的な見地から各探究分野の指導担当教員や生徒に対しても講評や指導・助言を行ったり、新たに連携・協力すべき関係機関の提言も行った。

⑨運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

- ・4回の運営指導委員会において、探究テーマの設定方法、探究活動の実施要領、他の校種での実践事例などの研究開発に役立つ指導・助言をいただいた。
- ・開催日を成果発表会に設定しているため、個々のグループの探究活動に関する指導・助言を多くいただいた。

⑩類型毎の趣旨に応じた取組について

【グローバル研修】

ア) 海外の学生とのオンライン交流（2年グローバルコース対象）

交流相手	日程	対象者	人数	概要
韓国高校生	令和3年7月19日	2年	40名	お互いの自己紹介や高校生活を紹介しながらの異文化交流

イ) 県内の外国人との交流研修

交流相手	日程	対象者	人数	概要
県内留学生	令和3年6月20日	全学年	87名	10か国からの留学生等と、各部の活動を紹介しながらの交流

【国内課題探究研修】

- ・分野別県内研修：1年生全員を対象に、7月に5分野計7か所の関係機関と連携し、地域課題研修を実施。県内の各種施設や有名観光地等でのヒアリングも実施。
- ・東北防災・環境研修旅行：10月、1・2年生希望者24名対象に、東日本大震災被災地で防災対策や復興事業、環境再生プロジェクト等を研修。探究の深化に大きく貢献した。
- ・岐阜スポーツ・芸術研修旅行：12月、サッカー部1・2年生36名対象に、サッカーJ3チームのFC岐阜や岐阜城を訪問し、スポーツや文化財を活かした地域振興について研修を行った。

⑪成果の普及方法・実績について

1・2年生ともに、専門家を招いた講演会や成果発表会の様子、現地での研修やヒアリングの様子等について、学校のウェブサイトで公表したほか、地域と連携したイベントやボランティア活動についても可能な限り報道提供を行った。各学年の関係者や他校の担当者等への公開・普及については次のとおりである。

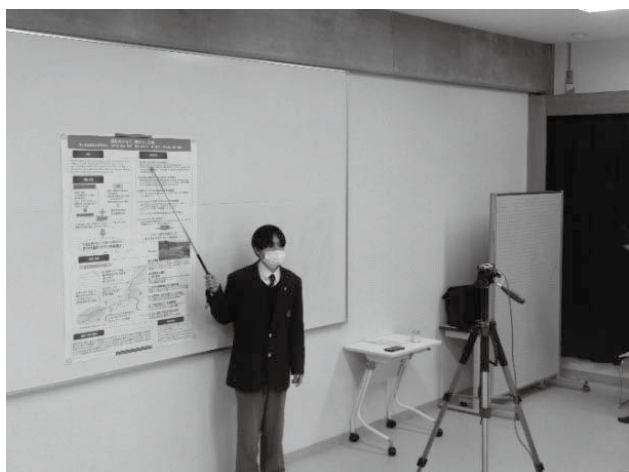
1年生：中間報告会を10月に実施し、全ての探究班が発表を行い、地域協働学習実施支援員・コンソーシアム構成員からの指導・助言を受けた。また、成果発表会を2月に実施し、ここでも全ての班が発表を行い、1年間の取組の総括を行った。さらに、この発表会を経て

選ばれた5分野の代表班が、3月にオンデマンド配信形式にて開催された県教育委員会主催の「香川県高校生探究発表会」において、発表動画の配信を行った。

2年生：全ての探究班による中間報告会を11月に、代表者発表会を2月に実施し、コンソーシアム関係者からの指導助言を得て、探究成果や諸課題等についての理解と共有を深めた。特に11月の中間報告会では「香川県高等学校教育研究会探究部会秋季研究会」もあわせて開催され、県内の各高等学校から教員が参加し、生徒による発表に加えて、本校の取組の成果を各学年団の担当教員から発表した。これにより、県内の高等学校全体の探究的な学びの推進につながった。また、1月に開催された「全国高等学校グローバル探究オンライン発表会」に出場した2グループが、英語発表部門で銀賞を、日本語発表部門で銅賞をそれぞれ受賞した。さらに、書類選考を通過した1グループが、2月に開催された「高校生国際シンポジウム」に出場し、オンラインにてポスター発表を行った。加えて、先述の「香川県高校生探究発表会」においても、校内選考で選ばれた2グループが発表動画の配信を行った。



<全国高等学校グローバル探究オンライン発表会>



<高校生国際シンポジウム>

< 1 年生探究テーマ及び主な現地研修先 >

分野	探究テーマ	主な現地研修先
グローバル	世界に誇れる香川～地元から発信していこう～	高松北中 1 年生にアンケート
	KEEP OUR 特産品～伝統の維持～	
	英語教育の問題点	北中高の教員, 生徒
	香川県の魅力～うどんの国の金色毛鞠～	栗林公園, 赤灯台, うどん屋「大円」, 屋島山上
	香川のテーマパークをよりよくするためには!?	校内アンケート
	地方でも外国人観光客を増やすには!?	
	韓国料理と日本の関係	香川県の中高生へのアンケート
	安心して楽しい旅を増やすには!? ～#JK が答えを探してみた!～	観光協会, 町役場への電話
	外国人が香川に来た目的とは!?	秩父が浜, アイパル香川
	私たちのまだ知らない kagawa	北高 1 年生へのアンケート
	外国人観光客が直面する問題	アイパル香川, 労働省
スポーツ	牟礼体育館の利用者数を増やすには	牟礼体育館
	香川県のスポーツを強くするには	香川県教育委員会保健体育課
	障がい者スポーツの現状と地域貢献	
	スポーツをする子供の人口を増やすための手段について	東部運動公園, オリーブガイナーズ
	香川県民の生活習慣病の現状と対策	有料型老人ホーム
	香川県から世界に通用するトップアスリートを増やすには	高松北高校
	東部運動公園について	東部運動公園
	生涯スポーツについて	
	アイスホッケーをメジャーにするには	アイスフェローズ
	高齢者でも楽しめる体づくり	
	筋肉痛を予防するためのストレッチ	中曽根鍼灸大学堂接骨院
	スポーツに興味を持ってもらうには	
	高齢者スポーツについての理解を深めよう	高松北高校
	スポーツ観戦者を増やすには	
看護・医療・福祉	REMOTE MEDICAL TREATMENT	かがわ医療情報ネットワーク
	いつまでも元気な高齢者になるために!	高松市長寿福祉課
	糖尿病における希少糖の効果	あまの内科クリニック
	妊娠・出産をする女性のためにできること	穴吹医療大学校
	生活習慣病の対策～中高生～	日本赤十字病院高松
	医療関係の仕事に興味を持ってもらうには	香川県立中央病院
	香川県のがんの受診率	香川大学医学部
	認知症予防 頭を働かせる事と繋がり	いわき病院, 大西センター病院, サンライズ屋島
	今の私たちにできること～ハンセン病と新型コロナウイルス感染症を通して～	香川県教育委員会
	看護師になる人を増やすには	穴吹医療大学校
	助産師について	小豆島中央病院

芸術	アートの島を知ってもらおう。～豊島について～	高松市美術館，豊島
	高松北高石あかりプロジェクト2021	石あかりロード周辺，実行委員会
	北高生の瀬戸内国際芸術祭に対する興味と感心	北中高生へアンケート
	音楽イベントによる香川県の活性化	北高生へアンケート
	エンジェルロードの魅力を伝えよう	小豆島
	うどんだけじゃない！香川県の魅力！	北高生へアンケート
	SNSを利用して香川の魅力を伝えよう	県内各所，高松市美術館
	和菓子をたくさんの人に食べてもらおう	寶月堂
	庵治石を若い世代の人にもっと知ってもらうために	讃岐石材加工協同組合
	香川県の魅力を広めよう	屋島展望台周辺
防災・環境	庵治の海のレジ袋を少しでも減らすために	香川大学創造工学部
	学校の災害復興について	高松市防災合同庁舎
	北高をよりよい避難所にするために	香川大学創造工学部
	南海トラフでの北高の被害予想と対策	香川大学創造工学部
	避難所でペットと快適に過ごすために	高松市防災合同庁舎
	避難者のために	香川大学創造工学部
	小豆島と直島で起こりそうな地震の被害	高松市防災合同庁舎
	北高生向けのハザードマップを作る	香川大学創造工学部



< 1年生中間報告会 >



< 1年生成果発表会 >

< 2年生探究テーマ及び主な現地研修先 >

分野	探究テーマ	主な現地研修先
グローバル	庵治の地域活性化-石材産業を守るために-	大丁場
	おいでまい四国遍路	香川県 23 カ所の札所, NPO法人遍路とおもてなしのネットワーク
	四国遍路を未来に繋ぐ	お遍路サロン
	地元愛! 香川の観光客数を我々のパンフレットで増加させよう!	香川県庁観光振興課への電話インタビュー, 屋島山頂
	オリーブ+SDGs=小豆島	小豆島オリーブ公園
	外国人観光客が来やすい町づくりにするためには	香川大学
	外国人の若者に香川の魅力を紹介しよう	
	高松和傘を広める	三好傘店
	こふんにコーフン! ? ~古墳で地域創生~	20個以上の古墳, さぬき市歴史民俗資料館
	直島の観光公害を解決しよう	
	コロナ後の外国人観光客を増やそう	大西・アオイ異文化体験茶会, さろんぶるー
	丸亀うちわを世界に発信しよう	うちわの港ミュージアム
	ごみ問題の解決へ~香川に住む外国人が日常生活で困らないようにするためには~	牟礼不動産, 斉藤工業
	小豆島の外国人観光客を増やすためには	小豆島
Let's cross the Seto Bridge ~観光客を増やすためには~	瀬戸大橋記念館とその周辺	
スポーツ	世界の遊びを通して運動意識をあげるには?	牟礼保育所, 大町コミュニティセンター, 高松北中高バレーボール部
	香川県の子どもたちに公園で運動するメリットとおすすめの公園を紹介しよう	地元の公園
	東部運動公園を活性化するためにはどうすれば良いか?	東部運動公園
看護・医療・福祉	What are you know about diabetes?	穴吹カレッジ, オイスカ, 地元のうどん屋約 10 件
	香川県の高齢者や外国人, 離島の医療の問題点と解決策	小豆島中央病院, 小豆島病院, 中央病院に電話
	視力について	
	外国人が安心して出産するためには	アイパル香川
	外国人が学びやすい介護	穴吹パティシエ福祉カレッジ
	朝食と健康の関係性について	徳島文理大学香川キャンパス
芸術	見て! 来て! 石あかりロード	むれ源平石あかりロード実行委員会 (場所:讃岐石材組合)
	シールアートを入り口として現代アートの楽しさや素晴らしさを広めよう!	
	源平の里むれにもっときてほしい!!	道の駅 源平の里むれ
	和三盆をもっと多くの人に広めるために	和三盆専門店 (豆花さん)
	地域に由来したマンホールデザイン	
	コロナに負けず飲食店を応援プロジェクト	飲食店「アンデルセン」

芸術	ホスピタルアートを普及させるには	四国こどもとおとなの医療センター、高松市立川添小学校、さぬき市立津田小学校、東かがわ市立引田小学校
	新屋島水族館の活性化について	新屋島水族館を訪問
	高松北高『むれ源平石あかり』プロジェクト2021	むれ源平石あかりロード実行委員会、牟礼コミュニティセンター、高松北高等学校で意見交換または打ち合わせ
防災・環境	家が僕たちの敵にならないように	
	機転利かせて、活かせ、河川	湊川
	志度湾の水質環境と周辺問題を解決するには	志度湾
	保育園児の夜の避難について	地元自治会
	八栗寺周辺を活性化させるには	八栗寺
	道路のひび割れ～危険性とそれに対する対策～	高松北高校周辺
	防災対策～北高オリジナル～	高松南消防署、防災センター
	海をきれいにするために	
	海のごみを減らすために一人一人ができること	
	南海トラフ巨大地震発生後の行動について	
	災害に備えて必要なものをそろえよう！	
	事前準備の大切さを広めるには	
	環境材料・リサイクルを利用して持続可能な社会の実現へ	
	南海トラフについて知識を深めよう	香川県総務部危機管理課
災害時に避難した後の安否確認の方法		



< 2年生中間報告会 >



< 2年生代表者発表会 >

<分野別講演会>

1年生の探究活動を支援するため、各分野に係る外部講師を招聘する分野別講演会を5月14日(金)に実施した。各界で地域振興や地域活性化について活躍されている先生方から、地域社会の現状や抱える課題等についての話を聴き、探究テーマの設定に向けて、より具体的な視点を獲得することができた。分野ごとの講師は以下のとおりである。

分 野	講 師	対象生徒
グ ロー バ ル	せとうち観光専門職短期大学 准教授 石床 渉 氏	44名
ス ポ ー ツ	公益財団法人香川県スポーツ協会 常務理事兼事務局長 高井 信一 氏	48名
防 災 ・ 環 境	香川大学創造工学部 教授 井面 仁志 氏	40名
芸 術	香川県政策部文化芸術局文化振興課 副主幹 久保 政昭 氏	39名
看護・医療・福祉	香川県健康福祉部医務国保課 主任 小西 勇輝 氏	40名



2年生の探究活動においても、同様な講演会を9月24日（金）に実施した。2年生は多くの班が既に探究テーマを決定した後の講演会であったが、探究テーマに係る課題や情報の収集・分析方法のあり方等について理解を深めることができ、探究活動を深化させていく上で大きな効果があった。

分野	講師	対象生徒
グローバル	香川大学インターナショナルオフィス 国際研究支援センター 副センター長 尾上 能久 氏	51名
	香川県埋蔵文化財センター 次長 北山 健一郎 氏	27名
スポーツ	岡山大学大学院教育研究科 准教授 高岡 敦史 氏	13名
防災・環境	自衛隊香川地方協力本部 東讃地区隊長 安田 正人 氏	78名
芸術	三豊市観光交流局 チーフマネージャー 石井 紫 氏	37名
看護・医療・福祉	香川大学瀬戸内圏研究センター 特任教授 原 量宏 氏	32名



8 各教科への波及効果

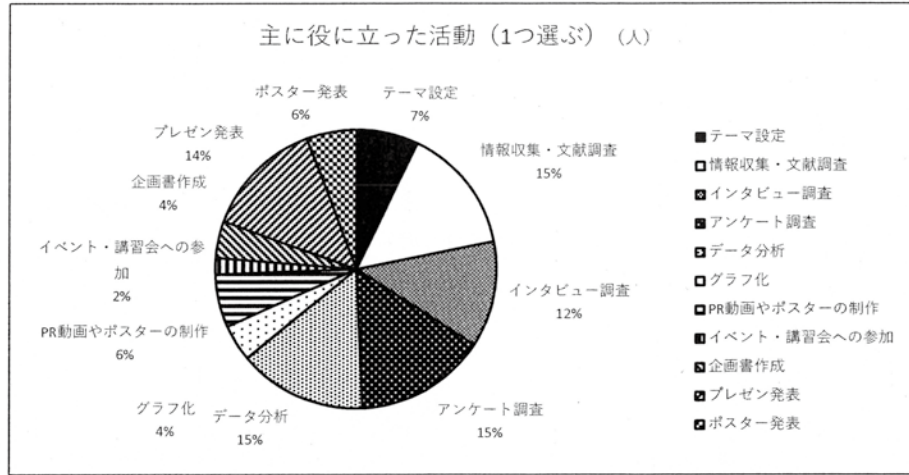
生徒・教員を対象に、「総合的な探究の時間」（本校では「GS（グローバル・スタディ）」と呼称）の学びが各教科の学びにどのように活かされたかについてのアンケート調査を行った。その結果・分析は次のとおりである。

GS(グローバル・スタディ)の学びが各教科の学びにどのように活かされたか

1. 生徒(高校3年生)アンケート調査の結果

(1) GSの学びの中で、主に役に立った活動は何か。(1つ選択)

テーマ設定	15
情報収集・文献調査	31
インタビュー調査	26
アンケート調査	32
データ分析	31
グラフ化	9
PR動画やポスターの制作	13
イベント・講習会への参加	4
企画書作成	9
プレゼン発表	29
ポスター発表	12
その他(グループ研究)	1
回答数(人)	212



(2)-1 (1)で答えた活動は、どのように役に立ったか。(複数回答・総計)

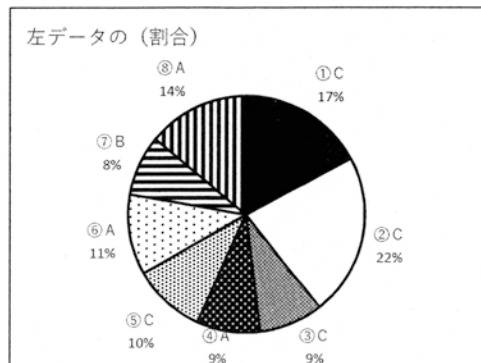
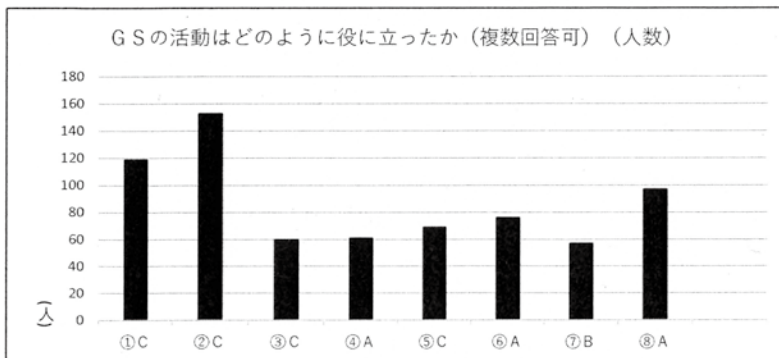
① ベアワークや意見を発表することに抵抗が少なくなった。積極的に活動(発表)できた。	119
② グループ活動(実験・実習含む)の際に協力や役割分担がスムーズにできた。	153
③ グループ活動(実験・実習含む)でリーダーシップを発揮できるようになった。	60
④ 情報収集により長文を読む力(読解力)がついたため、問題の内容を素早く正確に読み取れるようになり、得点アップにつながった。	61
⑤ 3年間やり遂げたことで得た「やればできる」という自信が、苦手な科目に取り組む際に役立った。	69
⑥ テーマと教科の内容が繋がっていたため、学習内容についての興味・関心が高められ、理解が深まった。	76
⑦ 自分の意見をまとめる経験を記述問題や作文・小論文で生かすことができた。	57
⑧ データ分析やグラフ化の経験により、グラフ問題や図形問題に積極的に取り組めるようになった。	97
⑨ その他	0
総計(人)	692

(2)-2 「身につけた力」を新学習指導要領の資質・能力の3要素にあてはめる。

<p>【総合的な探究の時間の目標】</p> <p>(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。</p>	<p>【資質・能力の3要素】</p> <p>⇒ A 知識、技能</p> <p>⇒ B 思考力、判断力、表現力</p> <p>⇒ C 学びに向かう力、人間性等</p>
--	--

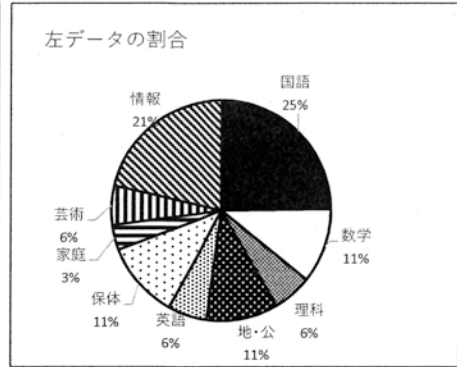
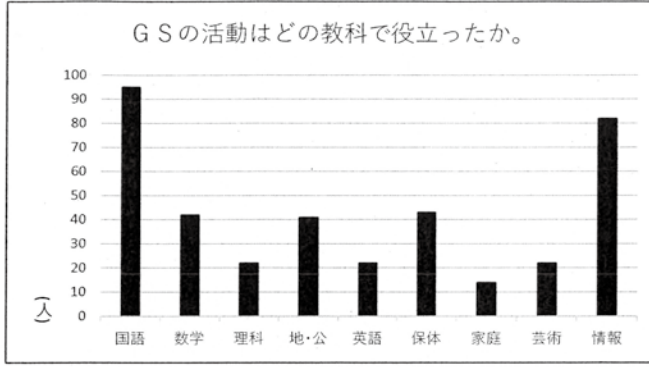


(2)「どのように役に立ったか」	3要素
① ベアワークや意見を発表することに抵抗が少なくなった。積極的に活動(発表)できた。	C
② グループ活動(実験・実習含む)の際に協力や役割分担がスムーズにできた。	C
③ グループ活動(実験・実習含む)でリーダーシップを発揮できるようになった。	C
④ 情報収集により長文を読む力(読解力)がついたため、問題の内容を素早く正確に読み取れるようになり、得点アップにつながった。	A
⑤ 3年間やり遂げたことで得た「やればできる」という自信が、苦手な科目に取り組む際に役立った。	C
⑥ テーマと教科の内容が繋がっていたため、学習内容についての興味・関心が高められ、理解が深まった。	A
⑦ 自分の意見をまとめる経験を記述問題や作文・小論文で生かすことができた。	B
⑧ データ分析やグラフ化の経験により、グラフ問題や図形問題に積極的に取り組めるようになった。	A



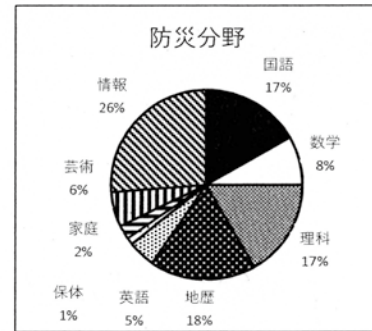
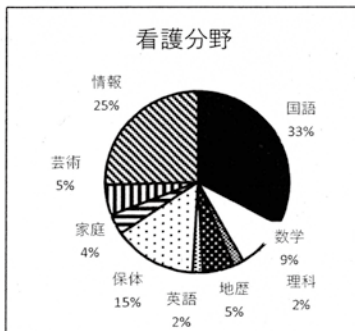
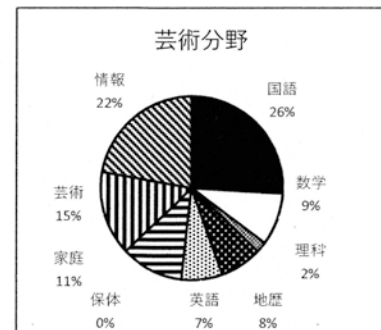
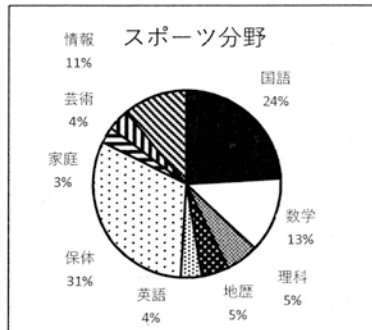
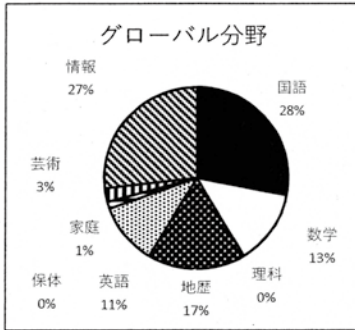
(3) (1)で答えた活動は、どの教科で役立ったか。(複数回答・総計)

国語	95
数学	42
理科	22
地・公	41
英語	22
保体	43
家庭	14
芸術	22
情報	82
総計(人) ##	



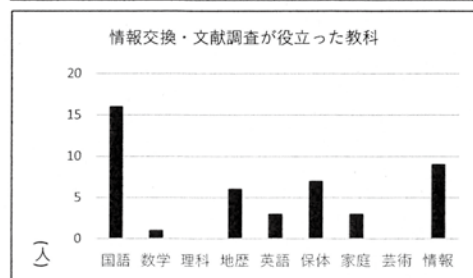
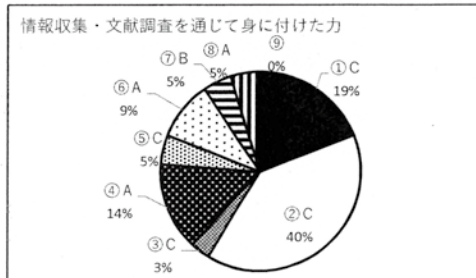
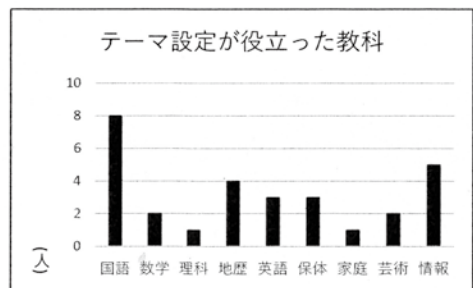
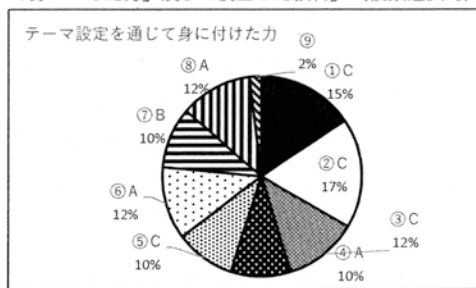
(4) 探究の分野ごとの、(3)の「役立った教科」(複数回答・総計)(探究分野と教科との関連性)

	国語	数学	理科	地歴	英語	保体	家庭	芸術	情報	回答計	
グローバル 分野	45 人	23	11	0	14	9	0	1	2	22	82
スポーツ 分野	63 人	26	14	6	5	4	34	3	4	12	108
芸術 分野	29 人	14	5	1	4	4	0	6	8	12	54
看護 分野	30 人	18	5	1	3	1	8	2	3	14	55
防災 分野	45 人	14	7	14	15	4	1	2	5	22	84
人数計	212 人	95	42	22	41	22	43	14	22	82	383

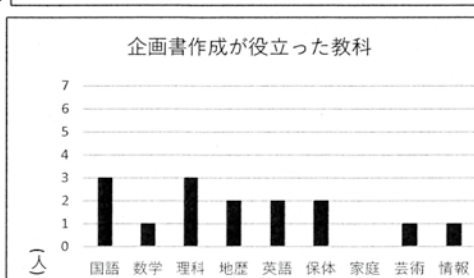
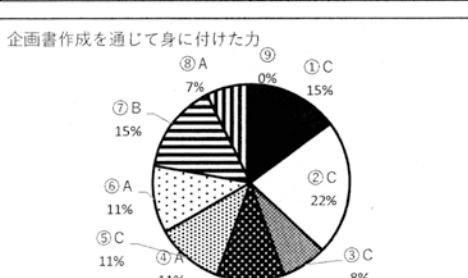
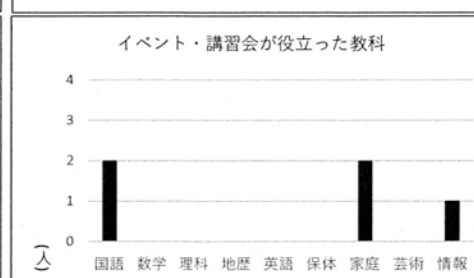
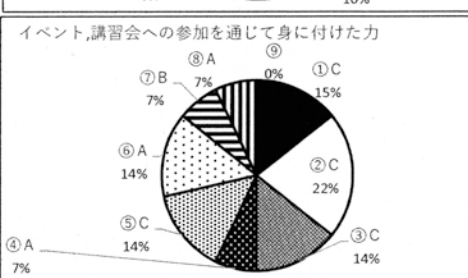
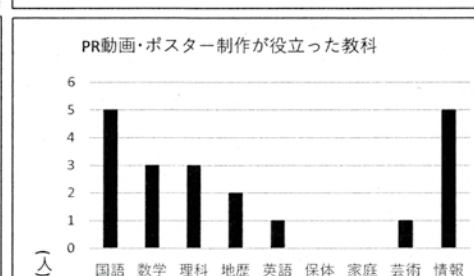
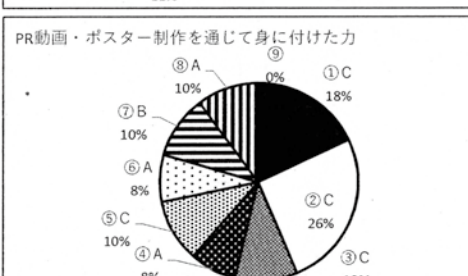
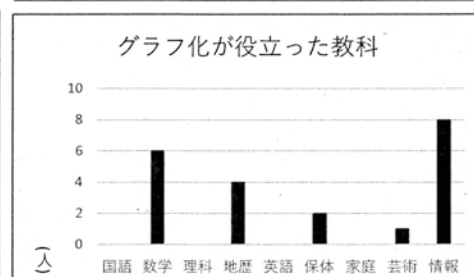
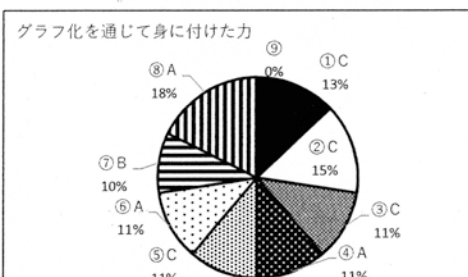
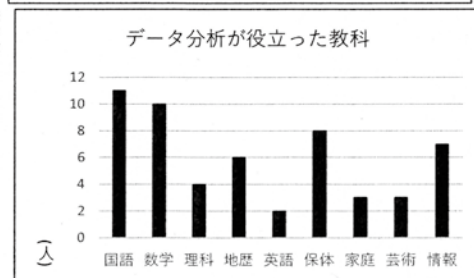
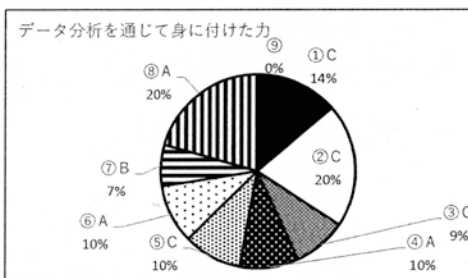
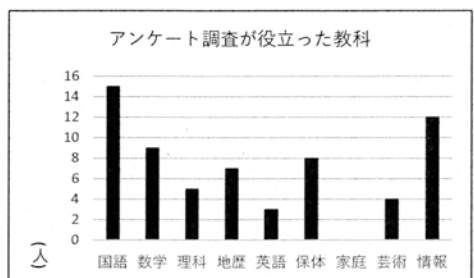
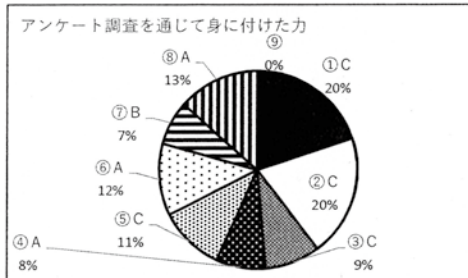
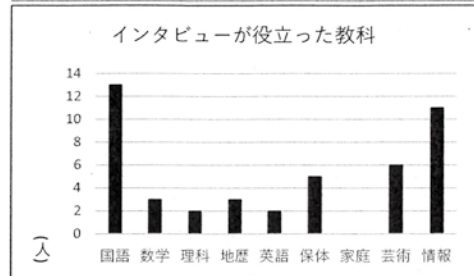
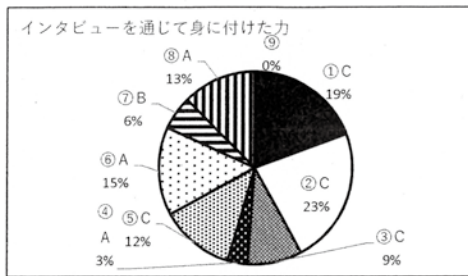


(5) (1)の「役に立った活動」ごとの、「身につけた力」及び「役立った教科」(複数選択可)

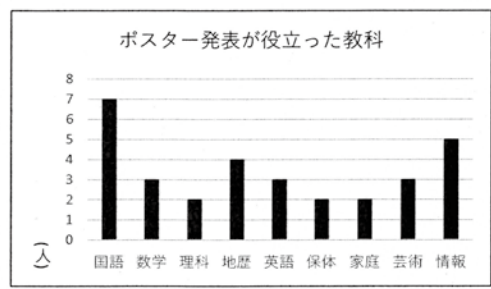
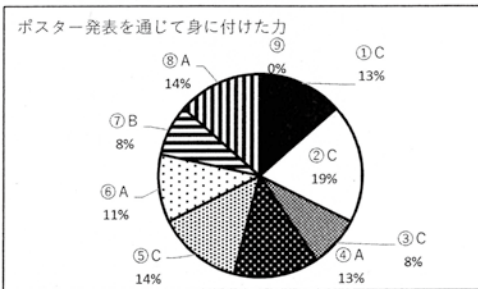
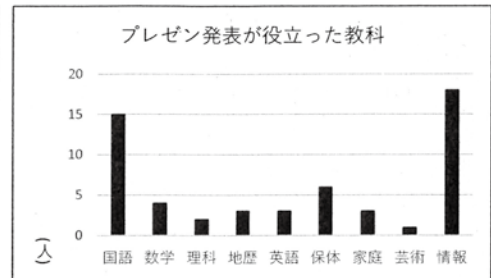
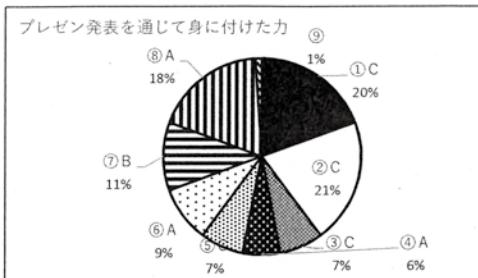
テーマ設定(人)	活動	国語	数学	理科	地歴	英語	保体	家庭	芸術	情報
15	①C	8	2	1	4	3	3	1	2	5
	②C	9	2							
	③C	6	1							
	④A	5	4							
	⑤C	5	3							
	⑥A	6	3							
	⑦B	5	1							
	⑧A	6	2							
	⑨	1	5							
31	①C	12	16							
	②C	25	1							
	③C	2	0							
	④A	9	6							
	⑤C	3	3							
	⑥A	6	7							
	⑦B	3	3							
	⑧A	3	0							
	⑨	0	9							



インタビュー調査 (人)	26	①C 17	国語	13
		②C 20	数学	3
		③C 8	理科	2
		④A 3	地歴	3
		⑤C 11	英語	2
		⑥A 13	保体	5
		⑦B 5	家庭	0
		⑧A 11	芸術	6
		⑨ 0	情報	11
アンケート調査 (人)	32	①C 22	国語	15
		②C 22	数学	9
		③C 10	理科	5
		④A 9	地歴	7
		⑤C 12	英語	3
		⑥A 13	保体	8
		⑦B 8	家庭	0
		⑧A 15	芸術	4
		⑨ 0	情報	12
データ分析 (人)	31	①C 14	国語	11
		②C 21	数学	10
		③C 9	理科	4
		④A 10	地歴	6
		⑤C 10	英語	2
		⑥A 10	保体	8
		⑦B 7	家庭	3
		⑧A 21	芸術	3
		⑨ 0	情報	7
グラフ化 (人)	9	①C 8	国語	0
		②C 9	数学	6
		③C 7	理科	0
		④A 7	地歴	4
		⑤C 7	英語	0
		⑥A 7	保体	2
		⑦B 6	家庭	0
		⑧A 11	芸術	1
		⑨ 0	情報	8
PR動画・ポスター制作 (人)	13	①C 7	国語	5
		②C 10	数学	3
		③C 4	理科	3
		④A 3	地歴	2
		⑤C 4	英語	1
		⑥A 3	保体	0
		⑦B 4	家庭	0
		⑧A 4	芸術	1
		⑨ 0	情報	5
イベント・講習会への参加 (人)	4	①C 2	国語	2
		②C 3	数学	0
		③C 2	理科	0
		④A 1	地歴	0
		⑤C 2	英語	0
		⑥A 2	保体	0
		⑦B 1	家庭	2
		⑧A 1	芸術	0
		⑨ 0	情報	1
企画書作成 (人)	9	①C 4	国語	3
		②C 6	数学	1
		③C 2	理科	3
		④A 3	地歴	2
		⑤C 3	英語	2
		⑥A 3	保体	2
		⑦B 4	家庭	0
		⑧A 2	芸術	1
		⑨ 0	情報	1



プレゼン発表 (人)	29	①C	19	国語	15
		②C	20	数学	4
		③C	7	理科	2
		④A	6	地歴	3
		⑤C	7	英語	3
		⑥A	9	保体	6
		⑦B	11	家庭	3
		⑧A	18	芸術	1
		⑨	1	情報	18
ポスター発表 (人)	12	①C	5	国語	7
		②C	7	数学	3
		③C	3	理科	2
		④A	5	地歴	4
		⑤C	5	英語	3
		⑥A	4	保体	2
		⑦B	3	家庭	2
		⑧A	5	芸術	3
		⑨	0	情報	5



(5) 特徴

①「主に役に立った活動」について

・情報収集、インタビュー調査、アンケート調査といった、「調査」に関することが40%以上を占めた。

②（その活動が）「どのように役に立ったか」について

・「積極的に活動した」、「協力して活動した」、といった「学びに向かう力、人間性」に関すること（①②③）が40%以上を占めた。

・「データ分析やグラフ化の経験により、グラフ問題や図形問題に積極的に取り組めるようになった」が14%あった。

③（その活動が）「役に立った教科」について

・「国語」、「情報」が多く、両教科で46%を占めた。

④（探究の分野ごとの）「役に立った教科」について（探究分野と教科との関連性）

※どの分野においても「国語」、「情報」の割合が高いが、それ以外の傾向について。

- ・グローバル分野では地歴(17%)、数学(13%)、英語(11%)の順に多い。
- ・スポーツ分野では保体(31%)、数学(13%)が多い。
- ・芸術分野では芸術(15%)が多い。
- ・看護分野では保体(15%)が多い。
- ・防災分野では地歴(18%)、理科(17%)が多い。

関連する教科の割合が高い。

⑤「役に立った活動」ごとの「身に付けた力」及び「役に立った教科」について。

【テーマ設定】

・C「学びに向かう力、人間性」に関するもの（①②③⑤）が54%を占めたが、A「知識・技能」に関するもの（④⑥⑧）が32%、B「思考、判断、表現」に関するものが10%と、多領域にわたってバランスよく、資質・能力に役立って

・「役に立った教科」についても、比較的多くの教科で役に立っていることが読み取れる。

【情報収集、文献調査】

・C「学びに向かう力、人間性」が過半数以上（とりわけ②「役割分担」が大半）だが、④「長文読解につながった」というのも14%見られた。

【インタビュー調査、アンケート調査】

・ともに、C「学びに向かう力、人間性」が過半数以上であるが、「⑥学習内容が深まった」についても比較的多く見られた。

【データ分析、グラフ化】

・ともに、「⑧グラフ問題や図形問題に積極的に取り組めるようになった」が多く見られた（20%、18%）。

・「データ分析」は多くの教科にバランスよく見られたが、「グラフ化」は「情報」、「数学」、「地歴」といった特定の教科に見られた。

【PR動画、ポスター制作】

・全体の結果とほぼ同様の値を示した。

【イベント・講習会への参加】

・回答数は4というように少ないが、⑥「学習内容が深まった」「家庭」で役に立ったという回答からも、これを選んだ者にとっては、参加したイベント・講座がとても印象的だったということが読み取れる。

【企画書作成】

・⑦「記述問題や小論文等」で生かすことができた」といった、B「思考力、判断力、表現力」が最も高かった。(15%)
・「役だった教科」は、多教科にわたってバランス良く見られた。

【プレゼン発表、ポスター発表】

・「発表」という点では同じであることから、「身に付けた力」については、ともに似た結果となっている（⑧「グラフ問題や図形問題に取り組めるようになった」が比較的高い）が、「役立った教科」については、「プレゼン発表」では「国語」、「情報」に偏っているのに対し、「ポスター発表」では全教科にわたりバランスの良い結果となっている。



2. 考察

(1) 学科横断的カリキュラムマップの必要性

- ・生徒は「総合的な探究の時間(GS)」の学びが教科の学習で役に立った点については、積極的に活動したり、他者と協力したり、リーダーシップを発揮したり、苦手な科目にも取り組んだりといった、主にC「学びに向かう力、人間性等」という点を挙げていることがわかった。
- ・一方、教員は、資料やデータの分析、プレゼン資料の作成、成果発表等、活動を取り入れた学習や、実際の社会の状況や課題の考察といった、主に、A「知識・技能」、B「思考力、判断力、表現力」の観点から、役に立ったと思っていることがわかった。
- ・このことは、いわばミスマッチの問題として捉えられる。生徒にとっては、本来なら、A「知識・技能」、B「思考力、判断力、表現力」の観点から、「総合的な探究の時間(GS)」の学びを活用し、教科の学びをより深めることができるはずなのに、実際には、生徒自身、その意識が希薄であるために、いまひとつ学びの機会を生かしきれていないということである。また教員にとっては、生徒はせっかく、「総合的な探究の時間(GS)」において、他者と協働して活動したり、苦手なことにも挑戦したりという、C「学びに向かう力」が身についたという自覚を持っているのに、その点を顧慮していないために、A「知識・技能」、B「思考力、判断力、表現力」の観点でしか教育効果を測れなかったり、教科指導において、生徒の主体性や自己肯定感を積極的に評価したり、その機会を設けることがなかったりといったことである。
- ・よって、今後は、「総合的な探究の時間(GS)」においては、「活動のこの部分が、この教科のこの学習内容に結びついた」といった、学科横断的なカリキュラムマップを作成し、それを生徒と教員で共有していくことが望まれる。
- ・ただし、生徒の探究のテーマは、個々に違うものとなることから、高校3年生の、成果報告が済んで探究活動が一段落した時点で、生徒相互で、「探究活動のここが教科の学びのここに具体的に関連させることができる」、ということについての確認の機会を設けて、カリキュラムマップを作成するというのが実際的であると考え。また、そのカリキュラムマップの蓄積は、ひいては探究活動の効率化にもつながるものと考え。

(2) 「総合的な探究の時間(GS)」における活動内容の重点化、意識化

- ・生徒アンケート(2)『「総合的な探究の時間(GS)」の活動がどのように役に立ったか』では、「積極的に活動した」、「協力して活動した」、といった、C「学びに向かう力、人間性」に関すること(①②③)が40%以上を占めた。
- ・また、その活動が役に立った教科では「国語」と「情報」が46%を占めた。
- ・このことは、「総合的な探究の時間(GS)」で得られたC「学びに向かう力、人間性」が、特定の教科のみには当てはまりにくいということが考えられる。また、「国語」という教科はその教科の特性からして、言語を使った活動全般が対象となることから、生徒は該当する教科として選んだということもあると思われる。また「情報」については、1年生で週2時間実施の「情報」のうちの、1時間を「総合的な探究の時間(GS)」と関連させた指導計画を組んでいるために、分析の過程で情報処理を行うにしても、プレゼン資料をつくるにしても、「情報」を「役に立った教科」として挙げたケース多かったと予想される。
- ・よって、今後いっそう、「総合的な探究の時間(GS)」での学びを「国語」、「情報」以外の教科においても活用していくためには、「総合的な探究の時間(GS)」の諸活動の中でも、とりわけ今回のアンケートで広く役に立ったとの回答結果が出ている、「テーマ設定」、「データ分析」、「企画書作成」、「ポスター発表」に、重点的に取り組ませるということも有効ではないかと考える。また、生徒のアンケート結果(4)「探究分野ごとの『役に立った教科』」からの、関連性のある教科は探究分野ごとに特徴があるという回答結果を踏まえると、各分野の指導をする教員をニーズの高い教科か

ら充てるといった、教員配置上の工夫をすとか、生徒には「この分野はこの教科での知識が役に立つ」といった意識をあらかじめ持たせておくといったことも効果的だと考える。

(3) 課題解決型の学びとその評価の充実

- ・研究開発の目標が「体感力」、「対話力」、「探究力」、「提言力」の育成であり、その基盤となるのが「体感力」であることからすれば、生徒のアンケート結果が、「C『学びに向かう力、人間性』において役に立った」が一番多くなることは、まさに教育の成果によるところであり、自明のこととも考えられる。
- ・すると、「総合的な探究の時間(GS)」の学びと教科の学びと連携、いわゆるカリキュラム・マネジメントの一番の課題は、生徒が「総合的な探究の時間(GS)」で育んだ資質・能力を各教科の学びでも発揮できるよう、各教科の学びにおいても、「体感力」、「対話力」、「探究力」、「提言力」を活かす機会、つまり課題解決型の学びの機会を多く設定し、それを積極的に評価することにあると考える。
- ・現在でも、「主体的、対話的で深い学び」を取り入れた学習を、各教科で推進しているところであるが、学習の評価の段階でペーパーテスト中心になってしまっているところからすれば、教員も生徒も「総合的な探究の時間(GS)」で得られた「体感力」、「対話力」、「探究力」、「提言力」については、なかなか教科の学びの成果として実感できていないということが考えられる。
- ・よって、観点別評価が令和4年度から学年進行で始まるにあたり、各教科において「学びに向かう力」を適切に評価することは、今後、とても重要になってくると考える。

3. まとめと提言

- ・本校では2年生から、難関国公立大学を中心とした進学を目指す「飛翔コース」、グローバル化の時代を生きるにあたり多くの校内外・国内外の研修等を体験してその資質・能力を養う「グローバルコース」、自身の興味・関心のある教科の学びを中心に、学びながら自身の適性を知り、将来の志望を見つけてその実現を目指す「カルチャーコース」、スポーツに関心のある生徒が集まり、ともに広く深くスポーツの知識・技術を身に付けていくスポーツコースに分かれて学んでいる。そしてその選択にあたっては、生徒は、将来の夢や、進路志望、自身の興味関心等に応じてコースを決定している。
- ・とすれば、各コースのカリキュラムがどうであるかということに加え、各コース、「総合的な探究の時間(GS)」において、どのようなテーマ設定の下、どのような探究活動を行っているか、またその活動は、各教科の学びにどのようにフィードバックされているかということをも明らかにしておくことは、各コースの特色を際立たせるにあたっても大いに役立つと考えられる。
- ・よって、「総合的な探究の時間(GS)」の学習内容についても、各コースのテーマ及び学びのスタイルの傾向に合わせて特色あるものとなるよう、各コースで工夫していくことも大事になると考えている。

9 生徒アンケートによる分析

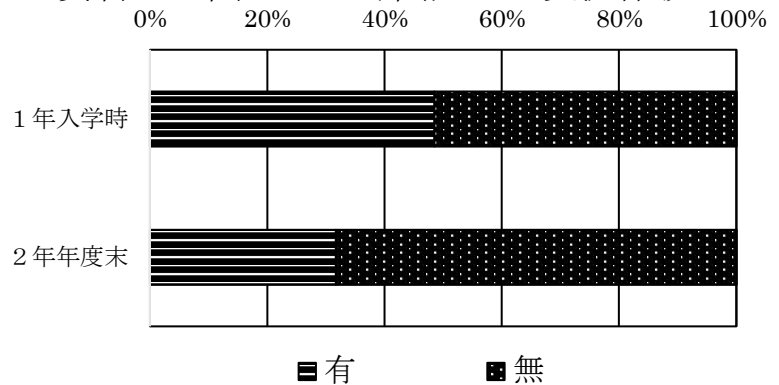
今年度末に、2年生を対象に「グローバル体験及び地域貢献意欲等に関するアンケート」を実施した。この2年生が入学した当初の時期に実施したアンケートと比較し、本研究開発を検証する。

資料1は、国内での外国人との交流体験の有無についての比較である。入学時のアンケートでは、入学前、つまりコロナ禍になる前の体験について聞いているので、北中3年時に本校に来た留学生との交流や本校ALTとの会話体験を挙げている生徒が多く、それらを除くと、2年年度末の結果とほぼ同数となる。つまり、入学前に学

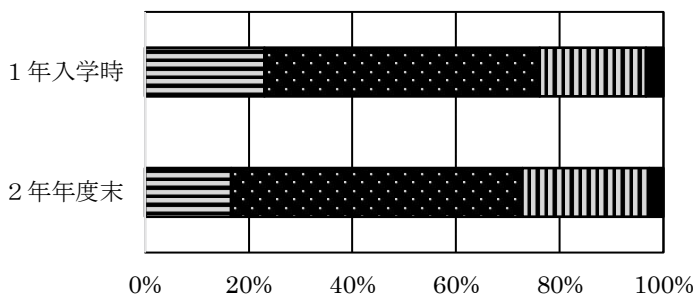
校関連以外で自ら体験していた外国人との交流の部分で、コロナ禍に襲われた今年度については、グローバル事業の体験が補ったと言える。現在は、学校での取組がなければなかなか交流が進まないため、今後も積極的に外国人との交流といったグローバルな体験を設定していくことが大切であると考える。

資料2, 3は、学校周辺地域（牟礼，庵治，屋島エリア）や香川県に対する生徒の意識の変化を見ようとしたものである。どちらも誇りに思っている生徒が多いが、その割合は学年が上がると若干減少している。また、香川を誇りに思う生徒の方が、周辺地域を誇りに思う生徒より若干多いことが読み取れる。この傾向は、1学年上の生徒でも同様であった。生徒は、中学生から高校生になるにつれて生活圏が広がることに加え、特に高2の後半からは卒業後の進路を考え、県外の学校を考える生徒が増えるので、生徒の関心が自宅や学校周辺地域から県内全域、そして全国へと広がっていくのは自然な流れであるともいえる。そのような中、誇りに全然思わないという割合が、若干減少しているのは、地域を見つめなおすような教育施策を行ったことが原因の1つになっていると分析することもできる。

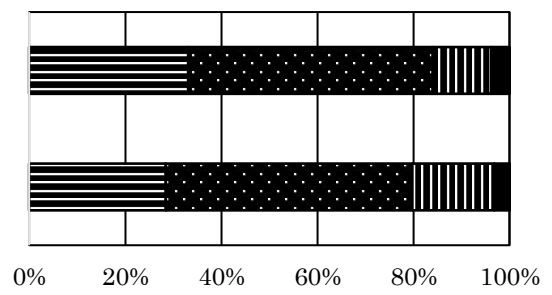
資料1 国内での外国人との交流体験



資料2 学校周辺地域を誇りに思うか



資料3 香川県を誇りに思うか



■大変思う ■少し思う ■あまり思わない ■全然思わない

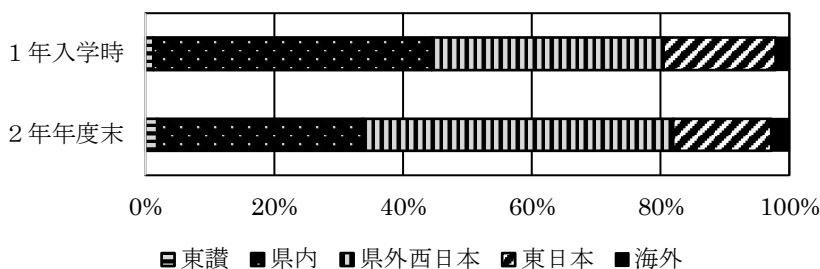
資料4, 5は高校及び大学卒業後の進路先の地域等についての意識調査の結果である。高校卒業後は、学年が上がるにつれ、県外志望が増えている。その原因は、先ほども述べたように、高2の後半くらいから自分の進路を具体的に考える機会が増え、より広い範囲から進路を選択するようになることで、県外進学割合が増えると考えられる。大学卒業後の香川へ戻る意識についても、学年が上がるにつれ戻りたいという意識が減少している。県外への進路を考える生徒が増えているの

で、それと連動していると思われるが、戻らざるもりのない生徒が増えたわけではなく、分からないという回答が増えている。県外の大学等に進学したとしても、将来的には地元に戻ってきて活躍してくれる人材が増えることを願う。

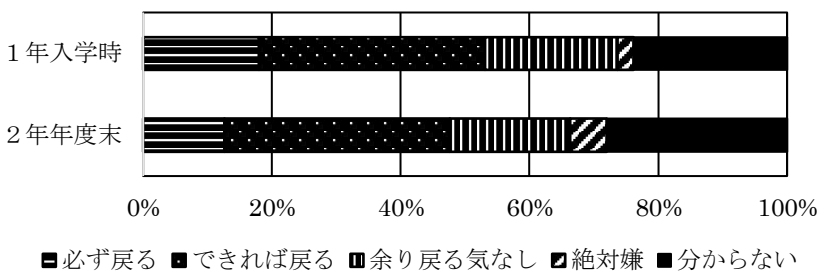
最後に、入学から2年間グローバル事業によるプログラムを受けてきた2年生に、自身の、また学校の授業の変化について聞いた。資料6及び7は、自身の探究力、対話力・プレゼン力が向上したと思うかを聞いたものである。ともに、3分の2ほどの生徒が向上したと答えている。

オンラインで香川県や全国の大会で発表をするために、プレゼンの練習等を繰り返したグループもあったが、そうではないグループも含め、これだけの数の生徒が自身の能力の向上を実感していることは、今回の事業の大きな成果であると言える。また、総合的な探究の時間以外の授業についての

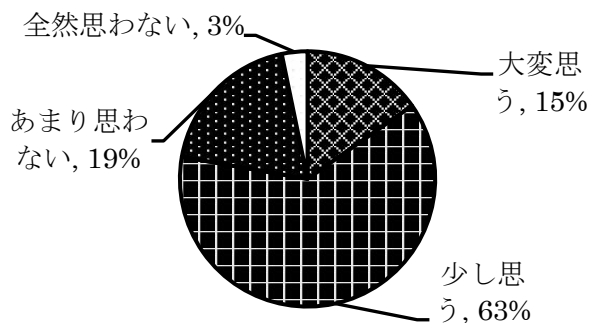
資料4 卒業後はどの地域に進みたいか



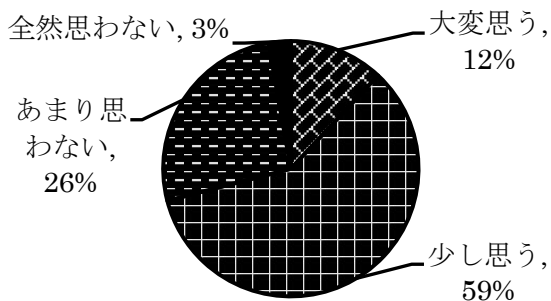
資料5 大学卒業後は香川に戻るか



資料6 探究力の向上

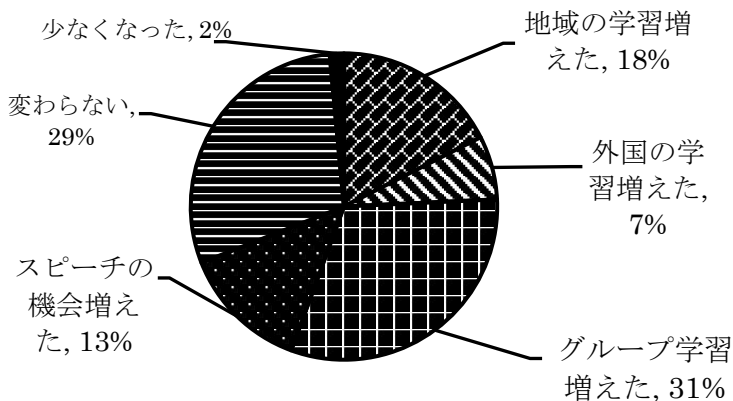


資料7 対話力プレゼン力の向上



印象を聞いたのが資料8である。ここでも、3分の1程度の生徒は、授業における変化は感じなかったと答えているが、3分の2程度の生徒は、授業で地域の課題を取り上げたり、外国の話題を取り入れたりすることが増えたと感じており、グループ学習やスピーチの機会が増えたと感じている。グローバル事業に取り組むことにより、その手法が他の授業にも波及していったことが読み取れる。

資料8 授業が変わった印象



10 ルーブリック評価による分析

昨年度に引き続き、テーマ設定や現地研修、班別活動や各発表会等、探究活動の節目においてルーブリック評価を積極的に活用し、今年度は全部で7回にわたって行い、1年生と2年生の評価の平均値を比較した。そのうち、顕著な違いが表れたのが以下の3つの表である。

資料①は「テーマ設定」を行った際の評価である。1年生と2年生の各項目の評価を比較して、最も数値が向上している項目の一つが「探究テーマとグローバル化との関連性」である。1年生では単なる自分の興味関心からテーマ設定をしている生徒が多かったようだが、2年生になってからは昨年の経験が活かされたことにより、グローバル化が進む本県の抱える問題が具体的に捉えられ、それをもとにテーマ設定をすることができていると考えられる。他の項目でも、評価が顕著に高くなっていることから、2年生では1年生よりも「テーマ設定」の重要性を意識して、明確な課題意識を持つことができていると言える。

資料① ルーブリック評価（テーマ設定）

項目	評価				R3 1年	R3 2年
	4	3	2	1		
探究テーマの立て方	研究テーマについて、先行する研究や文献などの調査が十分に行われており、既に明らかになっていることと、研究すべき問題が明確に区別されている。	研究テーマについて、先行する研究や文献などの調査がある程度行われており、研究すべき問題が設定されている。	研究テーマについて、先行する研究や文献などの調査があまり行われておらず、研究すべき問題が明確にはなっていない。	研究テーマについて、先行する研究や文献などの調査が全く行われていない。	3.0	3.3
探究テーマとグローバル化との関連性	グローバル化に関連した現代の地域課題を的確に理解できており、それを探究テーマの設定に活かしている。	グローバル化に関連した現代の地域課題をある程度理解し、探究テーマの設定に活かしている。	グローバル化に関連した現代の地域課題を意識しているが、探究テーマの設定に活かしてしていない。	グローバル化に関連した現代の地域課題を意識していない。	2.8	3.2
探究テーマの発展性・実現性	新しい視点で実現性のあるテーマ設定がなされており、地域社会が抱える諸問題の解決につながる可能性が高い。	具体性がある程度認められ、実現性があり、地域社会が抱える諸問題の解決につながる可能性がある。	実現性はあるが、地域社会が抱える諸問題の解決につながる可能性は低い。	具体性がないため実現する可能性がなく、地域社会が抱える諸問題の解決にはつながらない。	3.0	3.2

資料②は「現地研修」を行った際の評価である。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症のために現地研修が思うようにできなかったことは事実である。しかし、この資料からはそのような逆境にありながらも、1年生と比較して2年生では、少ない機会でも効率的に探究活動を進めようと「外部への連絡や事前調整」「外部とのコミュニケーション」に意欲的に取り組めたことがわかり、昨年度の経験が活かされていると思われる。その取組の結果が「課題の達成度」に表れている。「現地研修における班への貢献度」も1年生よりも評価が向上し、協働的な学びが進められていることも大きな進歩である。

資料② ルーブリック評価（班別活動－現地研修）

項目	評価				R3 1年	R3 2年
	4	3	2	1		
外部への連絡や事前調整	余裕を持って研修先と連絡を取りあい、スムーズに研修を進めることができた。	研修先と連絡を取りあい、無事に研修を終えることができた。	研修先と連絡を取ることが直前であったため、現地研修でうまくいかないことがあった。	事前に連絡を取らなかったため、訪問を断られた。	2.5	2.7
外部とのコミュニケーション	研修先の方々に対して積極的に働きかけ、良好な人間関係を築きながら情報収集やアドバイスを受けることができた。	研修先の方々に対して適切な言動を取りながら情報収集やアドバイスを受けることができた。	研修先の方々に対してある程度の対話をしてきたが、情報収集やアドバイスをあまり受けることができなかった。	研修先の方々に対して、積極的にコミュニケーションをとれなかった。	2.4	2.6
課題の達成度	地域社会が抱える諸問題の解決につながる有益な情報を得ることができた。	地域社会が抱える諸問題の解決に向けてある程度情報収集をすることができた。	地域社会が抱える諸問題の解決に向けて、自分の役割は果たすことができた。	地域社会が抱える諸問題の解決につながる情報が全く得られなかった。	2.4	2.8
現地研修における班への貢献度	自分の役割を果たすだけでなく、班のためにできることを常に考えることで、班に大いに貢献した。	自分の役割を果たすことで、班にある程度貢献した。	自分の役割は理解しているが、その責任をあまり果たしておらず、班への貢献度は低い。	自分の役割が理解できておらず、班に全く貢献できていない。	2.6	2.8

資料③は「成果発表」を行った際の評価である。1年生・2年生ともにスライド発表を行ったが、「スライドの見やすさ」「スライドの構成」といった技術的な部分での評価は向上しなかった。また、「チームワーク」の中の、「スライド作成」や「機器の操作」も技術的な事柄であり、活動内容の中で発表に必要な技術を身につける取組が不足していたことは否定できない。しかし、その一方で、「発表態度」が大きく向上したことは今後の様々な発表の場での効果が期待される。また、「研究の意義」についての評価が向上したことは、これまでの取組の中で培われた「探究活動」そのものの価値への認識が高まったと言え、これからも地域社会の抱える様々な問題解決への主体的な取組が大いに期待される。

資料③ ループリック評価（成果発表）

項目	評価				R3 1年	R3 2年
	4	3	2	1		
・発表態度 ①聞き取りやすい声 ②原稿を見ない ③表情が豊か ④声の抑揚	評価する点のすべてが十分にできている。	評価する点の多くができています。	評価する点の多くが不十分である。	評価する点のすべてが不十分である。	2.5	2.9
・スライドの見やすさ ①誤字脱字 ②文字のフォント ③文字の大きさ ④図の見出し ⑤見やすいデザイン	評価する点のすべてが十分にできている。	評価する点の多くができています。	評価する点の多くが不十分である。	評価する点のすべてが不十分である。	3.0	2.9
・スライドの構成 ①理解しやすい順番 ②スライドのつながり	各スライドの論理的な繋がりが明確になっており、研究内容を十分に理解することができる。	各スライドに論理的なつながりがあり、研究内容をある程度理解することができる。	スライドごとの繋がりが弱く、研究内容の理解が十分にできない。	スライドごとの論理的なつながりが見られないため、研究内容の理解が難しい。	3.0	2.9
・チームワーク ①分析やスライド作成 ②発表の際の役割分担 ③機器の操作	自分の役割を果たすだけでなく、班のためにできることを常に考えることで、班に大いに貢献した。	自分の役割を果たすことで、班にある程度貢献した。	自分の役割は理解しているが、その責任をあまり果たしておらず、班への貢献度は低い。	自分の役割が理解できておらず、班に全く貢献できていない。	3.0	3.0
・研究の意義 その研究に取り組むことで、地域社会にどのような貢献があるのかを見いだせた	先行研究から研究の意義について示されており、その研究を行うことで地域社会が抱える諸問題の解決につながる。	先行研究から研究の意義について示されているが、その研究を行うことで地域社会が抱える諸問題の解決につながるかどうか不明。	研究の意義について示されているが、先行研究や事例を前提としておらず、主観的な表現が多くを占めている。	研究の意義について示されていない。	2.6	2.9

11 今後の探究活動に向けて

研究開発の最終年度となり、カリキュラム開発においてこれまで以上に各教科・科目での取組を強化し、学校全体で取り組む体制が充実した。また、「総合的な探究の時間」と「社会と情報」の年間指導計画を工夫・連携することにより情報収集からまとめまで一連の探究活動を充実・深化させる形が定着した。さらに2年次以降、コース横断型のグループ編成が可能となり、探究活動の多角化と探究内容の深化が図れるようになった。対外的には、県内の関係機関との連携が大幅に進み、年間スケジュールに現地研修計画が位置付けられたり、昨年協定書を締結した4つの機関との連携もさらに深まった。新型コロナウイルス感染症のため、海外研修を含め外国人との交流が非常に難しい状態にあったが、県内の関係機関に在籍する多様な外国人との交流会や海外の学生とのオンライン交流、外国語の授業におけるコミュニケーション能力の育成等により、幅広い国際感覚と高度なコミュニケーション能力を身に付けさせることが可能となった。これらの取組により、生徒たち自身の地域課題に対する「体感力」が向上し、諸課題を自分事として解決しようとする高い意欲を持つことができるようになった。また、課題解決に向けての情報収集や探究を深める能力、さらには探究した成果を効果的に伝えるプレゼン能力や関係機関に主体的に提言・実践していく姿勢も大いに高まった。

以上のように、3年間の研究開発の中で、本校独自の探究活動の進め方が確立されたが、今後の探究活動を進めていく上で様々な課題も残されている。全ての探究班が主体的で実効的な探究活動を進められるようにするためには、一層のきめ細かい指導とともに、一人ひとりのキャリア形成と関連付けた指導が必要であろう。また、情報収集や整理・分析活動に不可欠なタブレット端末や無線LAN設備等の機器をさらに有効活用した情報収集活動や情報発信等の取組にも工夫をしていかねばならない。そして何よりも、これまでの取組の中で蓄積されてきた探究活動における人的・物的資源を、継続的かつ安定的に活用できる体制の確立が最大の課題である。これらの課題を克服できるよう、県内外の他校の先進的な取組例も参考にしながら、今後も本校の取組を進化させていきたいと考えている。